

〈研究成果の紹介〉

東紀州地どりの育成期飼料の違いが産卵性に及ぼす影響

畜産研究部中小家畜グループ

1. 成果の内容

本県独自に開発した肉用鶏「東紀州地どり」の生産現場では、飼育規模や飼料の入手方法等の問題から、様々な飼料を給与し肥育しています。近年、一部の雌鶏を残し、採卵用として活用する形態がニーズとして生じてきたことから、育成期（98日令時まで）平飼開放鶏舎にて飼養した雌鶏の飼料の違いが産卵性に及ぼす影響を検討しました（開放鶏舎、間口24cmケージへ1羽ずつ収容、採卵鶏飼料：粗タンパク質(CP)17%,代謝エネルギー(ME)2,830kcal/kg、Ca3.2%を毎日100g/羽定量給与)。育成期に給与した飼料内容（順に育成前期→後期→仕上）は、①特産肉用鶏飼料区：CP20%,ME3000kcal(無薬)→CP18%,ME3100kcal(無薬)→CP18%,ME3100kcal(無薬)、②採卵鶏飼料区：CP21%,ME2950kcal(有薬)→CP17%,ME2830kcal(無薬)→CP17%,ME2830kcal(無薬)、③ブロイラー飼料区：CP24%,ME3050kcal(有薬)→CP18%,ME3250kcal(有薬)→CP18%,ME3250kcal(無薬)です。

育成期の飼料の違いによる産卵性への影響はほとんどありませんでした（表1）。産卵率等の推移では、特産肉用鶏飼料区の成績がやや低下していますが、季節的（厳寒期）なもので、育成期の飼料の影響で

はないと考えます。また、産卵ピークは72~80%程度、以後55~60%程度で推移しています。初産は120日齢でしたが、50%産卵到達日齢は育成期の飼料栄養価(ME)が高いほど早くなり、平均141日齢となっています。産卵性は、産卵率60~65%、卵重は350日齢まで増加した後は58.2g前後で一定し、MS~Mサイズ卵が多く生産されていることが特徴です。卵質についても各区に差はなく、淡い褐色卵殻を産出し、卵殻質、ハウユニット等の値から市場性は充分にある水準です（表2）。

2. 技術の適用効果と適用範囲

東紀州地どりの生産農家（年間約1万羽）が対象で、地どり卵として販売するための参考成績となります。

3. 普及・利用上の問題点

東紀州地どりは、肉用鶏として開発されたものであるため、育成期から成鶏期を通じて制限給餌を行った方が余分な脂肪分が付きにくく、産卵率の向上と飼料費の節減が期待できます。

餌付け季節により、産卵性への影響がみられるので、採卵鶏と同様の光線管理が望ましいと考えます。

（佐々木 健二）

表1 性成熟と産卵成績(141~490日齢)

試験区分	初産日齢 (日)	50%産卵日齢 (日)	HD産卵率 (%)	平均卵重 (g)	産卵日量 (g)	飼料摂取量 (g)	飼料要求率	生存率 (%)	平均体重 (g)
特産肉用鶏飼料区	120	141	59.7	54.3	32.4	100	3.09	95.0	2,713
採卵鶏飼料区	121	147	64.2	54.6	35.1	100	2.85	94.9	2,680
ブロイラー飼料区	120	136	64.7	54.7	35.4	100	2.82	92.3	2,771
平均	121	141	62.8	54.5	34.2	100	2.92	94.1	2,721

表2 卵質（141~490日齢の調査値の平均値）

試験区分	卵殻強度 (kg/cm ²)	卵殻厚 (1/100mm)	ハウユニット	卵殻色		
				L値	a値	b値
特産肉用鶏飼料区	3.46	3.43	83.2	75.3	5.4	13.8
採卵鶏飼料区	3.45	3.40	83.0	76.4	6.2	14.5
ブロイラー飼料区	3.28	3.31	81.9	79.0	5.7	14.8
平均	3.39	3.38	82.7	76.9	5.8	14.4